

## 都市とへき地を考える - バランガイ・ビラーン村を訪ねて -

近畿大学医学部医学科6年 中村 理美

2009年8月の滞在時に、バランガイ・ビラーン村の公立小学校を訪問しました。HANDSの奨学生7人(全員ビラーン人です)が通っているので、彼らと会うためです。街道沿いの大きな小学校で、校庭も広々としていました。周囲には家々と商店が何軒かあります。最近、近くに他の小学校ができたそうで、1時間かけて通って来るような子どもは減りました。奨学生の何名かは親戚の家に寄宿し、週末自宅に帰っているそうです。子どもたちに夢を尋ねたら、学校の先生が一番多かったです。先生は各学年に一人ずつ。授業中にも関わらず、先生方が私とお茶をしてくれて、子どもたちは休み時間を与えられていました。先生方から要望をたくさん伺いました。教室の外にトイレが欲しい、よりよい教科書で教えたい、椅子がもっと必要、ノートが足りないなど。公立小学校も大変なことが分かりました。



HANDS 奨学生、学校の先生方、中村さん

村の医療については、よほどの大病でない限り病院には行かないし、たとえ癌だと分かっているでも死ぬときにしか病院に行かないのが普通なので、特に医療の充実はいらないと言われてしまいました。あればいいけど、なくてもどうにかなると。ワクチンの定期的な接種はあり、簡単な薬なら手に入るそうです。確かに風邪を引いていちいち病院に行くような国民性ではないし、彼らが満足しているなら必要以上の医療はいらないと感じました。都市に住む人の常識では、ここは測れないのです。そして、都市の人が考える

医療がベストとは限りません。死を運命と受け入れて悪あがきしないのも一つの選択肢です。

その後、ゴメロ、アトゥモロックなど HANDS が関わる村があるダタルバトゥング・バランガイの中心部を訪ねて、保健センターを見せていただきました。フィリピンによくある、典型的な保健センターでした。看護師が週1回、医師が月に1度、回診に来るそうです。医師が毎月来てくれるのは、村の保健センターとしては良い方なのだと思います。ただあまり活動していないように見えたので、栄養学講座などを定期的に開いたらいいと思いました。

都市とへき地が抱える問題の違いを実感した1日でした。

### みんなにっこり 新事務所の活動の様子



駅前事務所での月例会も会を重ねるごとに充実してきました。12月12日のトン汁忘年会には8名が参加。現地報告や60号の編集について話し合いました。1月の例会では広報担当で準備中の「HANDSの歴史」や30日の活動報告会について話しました。参加者は5名です。

例会は第3木曜日の午後1時から4時まで開催しています。2月は18日です。会員以外の方もぜひどうぞ！

また、仕事のご都合で12月例会には出席いただけませんでしたが、日系ペルー人の原口カルロスさんが12月からホームページの更新を手伝って下さっています。イベントの荷物運びもしますよと男性が少ないHANDSには心強い助っ人です。

横浜市から事務所家賃助成(2009年度1年限定)の決定をいただきました。

4月の本部移行をめざして準備を進めたいと思います。

引き続き事務所ボランティアも募集中です。

